

アジア・フィールド実習 2020 / 4th UST-USP symposium

原田 英美子
生物資源管理学科

2020年度のアジア・フィールド実習は、2021年3月4日－5日に、本学の協定校の一つである、サント・トマス大（University of Santo Tomas、USTとも表記）をパートナーとして4th UST-USP symposiumとしてオンラインで実施した（図1）。



図1 シンポジウム要旨集の表紙

サント・トマス大学は、フィリピン・マニラ市にある。1611年に設立され、現存する大学の中ではアジアで最も古い。本学とは活発な交流が行われており、2017年には、アジア・フィールド実習（旧科目名・国際環境マネジメント）として、学生8名+教員4名で現地に赴いている（詳細は環境科学部年報の報告を参照されたい。http://www.ses.usp.ac.jp/nenpou/np21/np21_108-119.pdf）。当時プログラムの一環として赴いたタール火山が、2020年1月に43年ぶりに噴火したことは記憶に新しい。湖の中に小島があり、その中にさらに小さな湖がある特徴的な地形だったが、火山活動の影響で大きく様子が変わっていると聞いている。また、2017年12月15日には、第3回 UST-USP symposium を本学で開催し、この際にフィリピンから15名が来日している（<https://www.usp.ac.jp/topics2/nt2017/s103/>）。

マニラが位置するルソン島は COVID-19 の影響でロックダウンされ、UST の講義は全てオンラインとなっている。本シンポジウムは UST で遠隔講義のために用いられている Blackboard システムに加えて Zoom を併用して実施することになった。シンポジウムの準備および運営は、UST 講師の Jonathan Carlo A. Briones 博士が中心となり進められた。Briones 博士は、学生時代から日本（本学および京都大学）との共同研究を行っており、イサザの食性についても研究業績を持つ。また、大学の夏休みを利用して本学に2ヶ月滞在したこともある。

Rey Donne S. Papa 理学部長および本学の倉茂好匡副学長の挨拶からスタートし、1日目に口頭演題9

題、2日目にポスター演題11題の発表を行った。プレゼンテーション動画（口頭発表15分、ポスター発表5分）をZoomで視聴した後、セッション単位でリアルタイムの質疑応答を行うという形式であった。ポスターの画像はオンライン閲覧使用の横長形式とし、別途Blackboard上に掲示した。地理的な距離があまり問題とならないことから、ベトナムのダナン大学やインドネシアのボゴール農科大学からも参加があった。フィリピン、ベトナムとインドネシア（-1時間）、日本（+1時間）のそれぞれの現地時間が併記されていた。

招待講演者の一人は、アメリカのProvidence Collegeで生物学者として教鞭をとるNicanor Austriaco教授であった。Austriaco教授は、USTの客員教授も務めており、フィリピンのパンデミック管理に携わる立場でもある。コロナウイルスのワクチンが実用化されたとして、接種を希望する人と躊躇する人がどれくらいいるか、ワクチン接種を希望しない場合その理由は何か、などを大規模なアンケートにより調査した非常に興味深いものであった。本演題については、資源3回生の石原大雅くんの詳細なレポートも掲載しているので併せて参照してほしい。この他にも、最先端の種々の技術を駆使して、抗ウイルス剤の開発を目指す様々な取り組みが紹介されていた。

コロナ禍での研究・教育活動について情報交換するセッションでは、この状況下で教育・研究活動を何とかして維持したいという大学教員としての意思は、国が変わっても同じなのだと感じた。口頭発表・ポスター発表とも内容は多岐にわたり、異なる分野の参加者に配慮した研究背景の説明が加えられていても、専門的な内容は理解が難しいことが多かった。日本人参加者でチャットアプリを立ち上げておき、専門が比較的近い教員が講演の要点を解説することで、お互いの理解を助けるという試みを行った。このような点でも、オンライン学会のメリットが生かされているのではないかと感じた。

対面式の学会のように、参加者同士が親しくなれるように工夫がこらされており、Zoomのブレイクアウトルームを用いて少人数で自己紹介させるice-breaking activityもプログラムに含まれていた。セッションの合間に行われたオンラインクイズでは日本の漫画やアニメの知識を問う極めて難易度の高い問題が繰り出され、1-3位はフィリピンのメンバーが独占していたのが印象的であった。日本側のsymposium chairを務めた浦部美佐子教授の挨拶で2日間に渡るシンポジウムを締めくくった。

2021年度のアジア・フィールド実習は、この原稿を書いている4月の段階で、実施内容・日程とも未定である。これまで通り渡航して実施できることを切に願っている。しかし、今回のオンラインシンポジウムの試みは、制限がある現状で何ができるかという可能性の一つを示していたと思う。

本学が発表した演題のリストを以下に示す。アンダーラインは発表者を表している。また、本シンポジウムの実施内容に関しては大学ホームページでも報告した (<https://www.usp.ac.jp/topics2/ustusp2021/>)。

<口頭発表>

Fieldwork goes online: A case of "Wood and Life"

Takuya TAKAHASHI, Yasuyuki KAGOTANI, Toyofumi TAKADA, Toshikazu IRIE

(環境科学部4学科教員)

Establishment of remote training course on cultivation

Emiko HARADA, Tatsuya UEMACHI (生物資源管理学科教員)

An example of remote field lecture of environmental science for 1st-year students of the USP

Misako URABE, Kentaro TAKI, Naoshi KANEKO, Emiko HARADA, Takuya SUMITA (環境科学部4学科教員)

<ポスター発表>

The introduction of Lake Biwa

Shinya NAGAYAMA (環境動態学専攻 M2)

Indigenous and introduced fauna in Lake Biwa –how to reduce the invasive fish species

Hayato WAKUDA (工学部材料科学科 B1)

Let's protect the waterside of the area! Native species of Lake Biwa

Keisuke OKUI and Tomoki HISAOKA (環境動態学専攻 M1、 D1)

Production and characterization of freshwater pearls in Lake Biwa

Emiko HARADA, Akiko HOKURA, Yoshinari ABE, Michio SUZUKI, Takuya OKUBO, Takashi KUSANO, Morihito NEMOTO (生物資源管理学科教員、東京電機大学、東京大学、水産試験場)

Process of building lake basin governance through multi-stakeholder collaboration: Case study of Akanoi Bay basin. Lake Biwa

Tadashi HAYASHI (環境政策・計画学科教員/湖沼流域管理研究センター)

Social movement for Lake Biwa and human well-being: Implications from case studies of Soap movement (Sekken-movement) and Rape bloom ecological movement

Miho MASAKI (環境政策・計画学科 B4)

Effective way of controlling *Ludwigia grandiflora*, an invasive aquatic plant toward the protection of Lake Biwa

Taiga ISHIHARA (生物資源管理学科 B3)

The impact of typhoon and torrential rain around Lake-Biwa: ordinance to promote flood control

Rie NAKAZAWA (生物資源管理学科 B4)

Factors affecting forest-related subjective well-being: A case study in the upper Yasu River watershed, Shiga Prefecture, Japan

Takuya TAHAKASHI, Yukiko UCHIDA, Hiroyuki ISHIBASHI, Noboru OKUDA (環境政策・計画学科教員、京都大学、総合地球環境学研究所、神戸大学)

Manganese oxides accumulated in submerged plant *Egeria densa* – evaluation of epiphytic bacteria and synchrotron radiation-based characterization of Mn

Keisuke OKUI, Tomoki ICHINOSE, Takahide KUROSAWA, Yoshiyasu NAGAKAWA, Hiroshi HASEGAWA, Akiko HOKURA, Emiko HARADA (環境動態学専攻 M1、東京電機大学、都立産業技術研究センター、福島大学、生物資源管理学科教員)

Mechanism of ultra fine bubble (UFB) in retaining freshness of cut flower

Rie NAKAZAWA, Akito TANAKA, Naoki HATA, Hisato MINAGAWA, Emiko HARADA (生物資源管理学科 B4、工学研究科 M1、生物資源管理学科教員、工学部機械システム工学科教員)

Does myrmecochorous plant *Venorina polita* var. *lilacina* avoid the seed predation by disperser ant *Pheidole noda*?

Shinya NAGAYAMA, Ko-ichi TAKAKURA (環境動態学専攻 M2、生物資源管理学科教員)

Hemiuroidan trematodes parasitizing freshwater fished in Argentinean Patagonia

Karin TSUCHIDA, Veronica FLORES, Gustavo VIOZZI, Carlos RAUQUE, Misako URABE (環境動態学専攻 D1、INBIOMA/ Comahue 大学、環境生態学科教員)

Phylogeography of *Rhabdias* spp. (Nematoda Rhabdiasidae) from *Bufo* species in Honshu and Kyushu, Japan: A possible case for cryptic species.

Arvin MARCAIDA, Minoru NAKAO, Kazumi FUKUTANI, Kanto NISHIKAWA, Misako URABE (環境動態学専攻 D2、環境生態学科 B4、京都大学、環境生態学科教員)